

源信の人間観

ロバート F. ローズ

恵心僧都源信（942-1017）によって著された『往生要集』は、日本浄土教の発展・定着に大きく寄与した書物である。この発表では主として『往生要集』によりながら、そのなかに見られる源信の人間観を考えてみたい。

寛和元年（四八五）に著された『往生要集』は十門（十章）から成るが、そのなかでも特に有名なのが、「それ三界に安きことなし。最も厭離すべし」という言葉で始まる最初の「厭離穢土」と題された章である。そのなかでは六道の苦しみが克明に語られ、『往生要集』のなかで最も有名な個所である地獄の描写もそこに含まれている。しかし、この章の狙いは六道全体の苦しみを説き示すことであるため、地獄以外にも餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の世界の苦しみが詳しく述べられている。

そこで、本発表では最初に「厭離穢土」に見られる人道を取り上げる。ここで源信は人間を、基本的には六道のなかに輪廻する存在であり、苦に満ちているものであると定義している。具体的には人を不浄、苦、無常の三側面から論じている。そして最後に、このような考察を通じて、人としての存在も「実に厭離すべし」と結んでいる。

そのように源信は、人間存在を苦に満ちたものと受け止めているが、同時に「我等、いまで曾て道を修せざりしきが故に、徒に無辺劫を歴たり。今もし勤修せずば未来もまた然るべし」と述べ、人は仏道を修することによって、六道を超え成仏することができることも力説している。天台宗の本来の立場からすると、仏果を得るためには厳しい菩薩行を修しなければならないが、源信によると、そのような厳しい菩薩行は濁世末代の衆生には甚だ困難であるため、念仏を修し阿弥陀仏の浄土に往生し、そこで菩薩行を行い仏果を求めべきであると示しているのである。

念仏の教えは円仁（794-864）によって比叡山にもたらされたが、日本天台独自の浄土教の言説が構築され始めたのは源信の一代前からの事と思われる。一例をあげると千観（918-984）は『十願発心記』を著し、そのなかで浄土往生を願う十願を發し、浄土に往生したときには一切衆生を済度するための菩薩行を行うことを誓っている。このような立場は源信にも継承されている。源信は『往生要集』のなかで、世親の『往生論』に見られる五念門（礼拝・讚歎・作願・観察・廻向）の枠組みを使って念仏を体系的に説いているが、作願を「菩提心を發す」こととして説いている。このことから知られるように、源信は浄土往生を菩薩行の一環として受け止めているのである。

以上のように源信は人間を六道に迷い、不浄、苦、無常という性格を持つ存在と定義しているが、同時に浄土に往生し、菩薩行を修することによって、確実に仏果に到ることができる存在としても理解しているのである。源信の人間観はこの二つの側面—つまり、人間は迷いになかで苦悩するとともに、その迷いを超えて仏果を得る可能性を持っている—を有しているといえよう。

キーワード： 『往生要集』、六道、菩薩行